和訓栞

那之部

十九

津田文庫
文庫1
1604
18

早稲田大学
圖書館藏書

倭訓栞前編十九

洞津　谷川士清　纂

那の部

名ハ生也成也春秋説題ニも名成也とえたり周人多く名ハ用字ハ体式用
な
う又那摩ハ名の梵語なるよし倶舎論ニえたり日本紀ニ字もまたなるよしあり
あざなるしハ訓せに弘決ニ西方風俗称名為尊ト北方風俗避名為敬トもいへり○
所及姓ニ名をつけて呼ハ名田ようの起まるなり松永名海老名の類也○人倫ニ
多く付ていへるたとへふれば武みなもれれとなるの類也皆名の系なるべし
○汝とるしらふもるもその略我とてしらふ如し日本紀万葉集ニえゆ名に同し
欲ニなるこえもふがなけばるしもよあうるせるにもなあるねるごたとへを
呼ものふ也されハ上古ハ建内宿祢の称に天皇とるがみこしよるハ汝之御
子也又己ニ支とるしるみし欲ごも古事記にえたり○己とよむハ大臣貴の称
なり大汝しも大名持しも云されハ系通るなるし欲ニなるがしらふきとれ
のがどもいつ○欲の下ニなるしらふ日本紀に出てゆられハ出て行くかづさせ

つだ文庫

010190597232

ふい潛さそん萬葉集にいさむとびてふい結びてん君にようふ〜い君よよう
ふん也後世い多く嘆とる詞ありのとけ〜れちうきふうつよろれ
の彩也ふかし〜れ常ふもかもふう〜みつべ〜れのれも同〜又ふうふすく
そふいなどのふい除去暮去ふ〜の語末の助辞の如〜とらう又朝ふく
よふく〜ふ〜のふい毎字をつねよ〜よふろよ似ようかれふてのふい去字
の義でハ不の字の義也又色よ出ふゆめ風よちう〜をふ人よ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜下知
の詞うらふい勿の字ハ義也真名伊勢物語よい諾字とよふるハ口語にうふ
ふそれふの義是也西土ふも那を助語よ用ふ〜車又〜ふう後漢書に公
是韓伯休那注よ那ハ餘語聲とあう世説ふも汝欲作沐德信那とえ〜
ふう○佛足石の歌よせ〜〜〜ふ〜ふいふとあるい給ひ祢とらふ如〜○文字の字を
ふ〜よむい天武記よえ〜〜ふう周禮よ掌書名於四方注よ古曰名今曰字とえ〜
〜ふう瑜祇経よ云那麼是文字也とらい梵語もまと迫〜○莫勿ふ〜をよむハ下
よそと兼ふう萬葉集よ莫倦莫恋曽ふとゝゆ又下のその辞ふさも古歌
に多〜常よい逆讀とる比例也大日経疏よ曩無也とらひ翻

譯名義集に那叅言不とえ〜ふう俗語不埒不届ふとらふも亦同〜○菜ハ可
菜の物ふるとらふ魏志よ倭地温暖冬夏食生菜とえ〜ふうもゝけふい
菘也紅毛語このおるこうふとらんさふあうゝつふい救荒野譜よ水菜とえ
えふう菜種ハ蕓薹也油菜ともらふ○高野山ふ〜〜〜とらふ所よ不蒔菜ゝて自然
生あう大師おせまて絶ゝ〜〜誓ひふるふ一奇事也○中とよむハ下略也日本紀
みえゆ○魚をよむいまふの略也記録よ真菜とも書て漢よも魚菜ふ〜つ
つりう又住吉うそい魚供とあまふ〜称〜平安すて鮭よふる小魚とゝ〜ふ
ごらひ尾刈の方言よ川魚のちひさゝを水ふとらひあめごの魚を日光すてい
ふふ〜ふとらう〜〜○京に口語のふいえて加賀越後も同〜

△ふあよ　名兄也古語多く名と添〜らう万葉集よい名姉とゝ〜ふ〜と
をよめり

△ふい〜　乃至の音也佛経よ多〜皆上下に挙て中に略とる辞也宋以前ハ
多く至乃とゝ似とう○内侍ハ女官也高内侍ハ高階成忠の女貴子也摂政
道隆のおうひ人倭歌に能〜文章に巧ゝとゝ南朝雑内侍ハ藤原基

俊の女敦人也新葉集ニ見ユ○内侍所ハ禁中ニあり建暦御記ニ白河院仰ニ内侍所神鏡奉出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留依此因縁女官奉守護と云〻る歟也温明殿と称するハかゝる名也漢董公傳の注ニくハしく御供ハ寛平二年ニ始るよし〻公事根源ニハ御神樂ハ一條院の長保四年ニ始る○内侍宣とハ西宮記ニ補藏人頭以下事所別尝上卿奉勅以定文給藏人了選補（テンス）或於御前定申仍仰出納以内侍宣昏之と云ハ太政官ニ付せ藏人ニ付く奏する歟内奏と云ニ意同し〻後漢昏ニ侍中者内侍也と云〻

ふいえん　源氏ニ見ユ内宴也春の内ニ文人を清涼殿ニめし〻て詩歌作る〻講せ〻る年あり保元中ニ信西ノ行く後ハ絶る〻〻

ふいぐん　内辯と云ハ元日の式ニあり即位以下諸節會ニ内辯と称し〻諸公事ニハ上卿と称を廃事歟辯備る名也○第二大臣以下義明門外ニ於く廃事歟辯備る歟外辯と云ハ

ふいぐ〻ろ　蔑ハよめろ無ゞ代の歟如無の意也俗ニふいぐ〻と云ハ秦誓ニ曰

稚相減（ナイカヒロミス）と云るも減蔑と同し〻源氏松子帝ふぐ〻衣の志〻けふを体ニ云ハ

ふいけうゐ　内教坊と云ハ大内うあ〻く女房の学問を〻又兼ふと云ふ所也思の侯の日記ニ内教場のふ〻をふと廿人ニ給ふ〻〻と蹈歌の下ニ云ハ今の大宿（オホトノヰ）と云

ふいこうあもせ　鳴鳥合の歟也と云ハ〻〻物語ニ見〻〻〻ふ歌賞を異島歟

ふいこのふち　多入洲也河内茨田郡諸福村ニ云ハ高尹千首ニ

つきふ〻いふ歟流ふ〻〻かう歟のふ〻くの月ニ志ハ〻〻の例

〈ふ〻ぐ　朝野群載東鑑ニ乃貢と云ハ天工開物ニ米穀の歟乃粒〻〻衣服

のきふ歟乃服〻〻ふ如し○乃米と云ハ〻〻類聚雑要ニ見ユ納貢字上林賦

ニ見〻〻〻

〈ふえ　蕎字とよめり万葉集に志ふえとよめり○源氏にふえる衣（キヌ）徒然草

ニふえ〻る〻〻志ふ〻〻〻〻〻〻〻ハ蕎志ふ〻れ〻る歟ふれハふえと書いぐ

ふえ〻〻えい〻　永正記古老口實傳ニえゆ引立えい〻也と云ハ伊勢神宮ニて

の名也

△ふるとり　源平盛衰記に名折とよへるを名を損ずる事とよへり也○古事記の歌に潮瀬のみ沼まとよくるはふぐりに同〜

ふをつく　古事記に着其御名とよゆ

ふるとつむ　前漢翟方進傳に埋名とよへるを白詩龍門原上土埋骨不埋名とよゆ

△ふる　中をよみ神代紀に内もよみ明とよへり○中山は愛宕郡也

夫木集に

君も来ぬ我も往来乃中山はふるきのこりて苔ぞ生ける

○哥の中山は清水寺の南にあり○天武紀ふるとよる伊賀の中山は伊賀郡にあり

○中第は大同聚類方にもこの此方豊中津吉傳村民多兼言上之於朝家也治麻之奇方也○中川は今の京極川也河海に二條以北号中川六條まて流るゝ近代事也後拾遺集に

行末を流く何に頼けむ絶々るものを中川の水

鴨川を東川と〜桂川を西川とも〜よれる故〜又奈良の東にあり添上郡に属を○式美濃國惠奈郡中川神社又や大平記にも源満仲中川の盗賊を誅ともいへり今の中津川なるか○仲神社は式伊勢國多氣郡に又ゆ齊宮式に竹中社とあり神祇志に中麻續御園とゝゆ今云中海なり○名に良をふるとよむ護良親王の如〜

ふるば　半沼にあり中端の義なる〜〜よて史字沼にあり○大半は四分二也小半は四分一也強半は三分二也弱半は三分一也

ふるの〜　半をよめり中の義也とは助の辞○半木の社は今中賀茂とふ賀茂上下の間に在沼りて也又流木の杜とふ為家卿の歌夫木集に〜〜

○半井は京烏丸中立賣の小に和気氏の故跡也とゝ板にて井内に〜〜半沼製藥の用〜〜半沼雑用の水〜〜よて半井と称と元尽藏に正四位典藥頭和気明重永正中人也為施薬院使薙髪号宗鑑半井氏之祖医人剃髪従是始とゝる

ふ字をよむ日本紀に〜〜ふるの義〜あり又ふる也万葉集

になりしを無有之とせるが如し陸佃が説に一は有一は無為作物之生死老
少一は有一は無何有窮已是之謂乍とみえしよりてとよみたちまちとよむも義
通へり又花に雪一花に百花初夜に暁を帯せる意を見しる辞也ともいへり
○日本紀萬葉集に随字をもよめる義も亦通へりされど日本紀に惟神をか
みながらとよみ遣唐使時奉幣祝詞に教悟給比那我良といへるはまゝの意な
るべし○長柄の橋は攝津にあり長柄豊碕宮は孝徳天皇の宮なれば其時より
なるべし紀畧に弘仁三年造長柄橋とみえし文徳實録に長柄頃年橋梁
断絶人不通請准堀江川置二隻船以通済渡とみえたり栄花物語に是
はなかしられん申といふ云ながき橋の柱まじ出よりて残りたりとみえたるは延
久五年一院御幸の時也○凢ての字によみつけるといふ詞もあり

なかし

長ばよあり流るゝ意也○名のりに慶をながとよむは畠山義慶あ
り○永ばながくとよむも同じ引也と注せり○長くもうなと讀るは後
拾遺集にきんなのよしとより帰るゝく遣しけるとある上のうなは万葉集
に欲得とかけるは於を也のうなも廉義公

昨日もなく逢ふしかへかしきかりむしほぞふは今の惜もあるなよ

是はたゞ同事なるが中におもしろし

なかめ

古事記に恒に長眼にふれども見えしより伊勢物語にも打長目と
みゆりしは愁へおりふ時に物をうちまもりゐるをいへり後に瞻望の意に轉し
いふ也○詠をよむは吟詠の舟ありよて義訓とせる也○霖をいふは神代紀にみ
え倭名抄にながあめとみえたり新撰字鏡に霤霣雺なともよめり長雨の義なり
哥には多く詠をかねていへり○源氏の哥に詠に長布を兼てよめり○小町が歌
になからめせしまふとよめるを詠に長雨ばそへたり古六帖に

朝なけに世のうき事ばしのびつゝながめせしまに年もへにける

なかば

流をよめり浪はなかるゝ義なるべしながらふとも見ゆらふ又る也万葉集に雨
雪のふる事を流るといへり博物志に文王の詔を引て地道尚右水潦東流と
みゆよて詩にも光陰の移り変るを東流といへり○盃の事にながれといふは
残瀝をいふ也○旗旛に幾ながれといふ延喜式に旒をよめり○蠟燭のながれ
まれ晋書に涙とみえたり○流の女流出の身は游女をいへり

よるうしを無有之と云う如し陸佃ゥ説ニ一ハ有一ハ無為作物之生死老

なかご

和名鈔木具ニ易以引て心をとあり中疑の義なるべし果蓏ニハ瓤以いへり俗ニハ心ハ音ニよれり○屏風ニいつる事類聚雑要ニ見ゆ○齋宮忌詞ニ佛を中子といふと心をとりて宗意とするをとりていふべし○刀ニもいへり剣をよめるも刀把也と注せり莖ハ周禮ニ見ゆ衆妙集ニ婬濱より人の安吉のなかごをおこせて銘なとよく侍るなれにあるつきとく文ありけれ

胝さし此代をしとへハ安かしれるなとたくしき緒のよするな

なかと

長門の國ハ豊前との間いと狭く長さ海門(ウナト)あれハ名ニ負ふべしとも穴門(アナト)と呼し事日本紀ニ見えたり○大同類聚方長門榮赤間稲置家秘之彦火々出見尊得於津志磨之方小児瘡以治する此方中にかゞるの肉乾二分事代主加之とえゆ

なかち

萬葉集ニ殿のなかちとえゆ日本紀ニ仲をよミ仲子となかちことよめり今も大和辺よいふ詞なり

なかれ

毋莫勿なとをよめりなくあれの義なくあるなる也皆禁止の辞毋ハ緩なる詞莫ハ出て来ね意勿ハ其ことをせね意也といへり曲礼の注ニ古言毋猶今言莫也と

見えし所ニよりてハ無もよみまも勿也と注せり休ハ勿の俗語詩ニ多く用ゆ

なかなか

万葉集ニ中くしと書ま却てといふニかよへハ喩へハ東へゆかんとて反ニ出るかことかへりて西へ行べきニなりたらんやうなる意也といへり半々の義ともいひ一説ニなかなかと重ねする詞也くハ反ゆ也といへり却ハ退也止也不受也と注せしか如し○俗語のなまなかといふ意ニ聞ゆるもあり古今集ニ

いそのかミふるの中道なかなかにみすハ恋しとおもはましやハ

○通俗の語意ハ領兼の詞にいつり中にも此意ある也俚語の結句しての意なる歌あり拾遺集

ことゝめる君ハなかなくつらくして今やまくらけ身をそうしる

なかなか

西宮記申文の條ニ無をなかなかといへり古語也北山抄同じ

なかざし

矢ニいふ中指の義ならハさしニ對していへり

ながうた

万葉集古今集源氏なとに見えて皆長歌を指せり俊成卿の千載集ニ長哥を短哥とせられしより彼是異説ありて万葉集にも常の歌を短哥短詠或ハ一絶なとえぬ是ハながうたを短歌とするハ極てひがこと也といへり

○古今集第十九に短哥と標して載たる所皆長哥なれハ千載集より始まるにもあれど拾芥抄に長哥ハ五七五七五七五七七七短哥ハ五七五七七とみえたりされど古今集載たる所も此数のことくもあれど詞書にハ多くかゝることなしされハ短歌と標せしハ古今集より誤りて伝へたるにや

ながつき　九月をいふ長月の義夜長月なるをもいふて拾遺集に秋を長月とよめり漢にもふるくいひ伝へたり○夏の日冬の夜ともに長けれどあまりせてハ長き日とハ春をいひ長き夜とハ秋をいふなるやといへり

なかうど　催馬楽になかうどともみゆ庭訓往来に仲人としるし訓蒙字會に呼男曰媒人女曰媒女總称中人といへり○仲人口といふ諺ハ世範に古人謂周人悪媒以其言語反復しえゆ古人とさせるハ戦國策にいふ蘓代か言也源氏にも此旨みえたり

なかだち　日本紀に内應又媒人とよめり中に立の義也新撰字鏡に媒なかだつとよめり

なかのゑ　中衛也外衛に對し兵衛にならひて公卿補任に大同二年改近衛為左近衛改中衛為右近衛○宿徳の大臣耆老の侍讀なと牛車宣下あるハなまて中衛に引入といひて年中行事歌合に
なかさて誰つかふる人の中にれ来に牛の車をかけて入らん
○神宮第一門第二門之間もかく中衛と称し或ハ中重也といひてか歟なかも中倍上紙十八枚とみえ也

なかとみ　中臣とよめり中つ臣の義也つハ助詞つれ反と也纂疏に天児屋命十世之孫臣狭山命始賜中臣姓とみゆ神と君との中執りて宜く奏請のよし也○伊勢桑名郡に中臣神社式にみゆ今市中に春日の社といふ是なるへし續日本紀に中臣伊勢連大沢賜姓伊勢臣とみゆ則

なかたち　倭名鈔に長刀ならひ訓せり今長刀とあるをなぎなたとよむハ訛なるへし

なかまき　中巻の義刃も柄も齊しく造れる物也元弘建武の比ならひ大長刀といふハ身も柄も五尺餘りの物ありけれハ此類ならふ成へし武備志に我朝の制に皮條を刀の鞘につけて此を肩にかけ或ハ手にとらしむるハ随後の用なる所是を大制といふとあるせしを什物なるへしといへり○信濃高井郡の

地名に七巻(ナヽマキ)村あり

ながれき　流人といふといへり獄令に本犯不應流而特配流者三載以後聴仕とみえたり拾遺集に

なかれ木も三年ありてハ相見てん世のうきことそかへらさりける

和泉國泉南郡の村名にもいへり

なかゞみ　倭名抄に天一神を訓せり中神の義金匱経に天一立中央為十二將定吉凶とみえ陰陽暦に天一遊行方角百事犯向之大凶とし又男女の中をさくる神なりといへり源氏になかゞ神ふさがりてとみえしたり暦家に此神四方に五日つゝ四維に六日つゝ凡て四十四日下土を廻る此をふさがりといふ物に物忌すといへり此後天に上りたまふ間癸巳を始とし戊申を終とし凡十六日を天一天上といふなりといへり通書大全に鶴神遊方毎日各有避忌祖癸巳日到戊申日鶴神在天无避忌者といふ是也百鬼経にハ天女化身なりといへり

ながはし　長橋の川竹とよめるハ禁中に長橋をいふ御殿より南殿へかよふ廊也とぞ或ハ長階と書す○勾當内侍を長橋の局と称するも是也掌侍四人の内の第一也

なかのまなか　萬葉集に信濃哥に中麻奈にうきをる舟とみえたり仙覚抄に河の中に洲のまなごなるをいふとぞ洲をまなかと呼ハ古言なりや今佐久郡にまなかし村高井郡に間長瀬村ありて倶に洲によしあるべし今に河中嶋あるも中まな轉して中嶋となりけるにやといへり河中嶋の地名ハ東鑑盛衰記にみゆ

なかのつかさ　倭名抄に中務省をなかのまつりごとのつかさとよめりその略也○歌人中務ハ敦慶親王の女也

ながらへる　存命をも長生をもいふ長く世を経るの義也又らへハ流るに同しよそながらへてとながれてとよめる歌有といへり○萬葉集流経(ナガラフル)妻吹風とよめるハ衣の裔(スソ)の長くもえするをいへり○ながらへハ又此ころやしのばれんの歌ハ新古今集に題しらず家集に三條右大臣いまた中將にておハしける時つかはしけるとみゆこともいひつゝくおもひよくなきさかうにいふを見せに侍る歌ハたくひなくなん白氏文集に東城尋春詩に老色日上面歡情日去心今既不如昔後當不如今

この心也と○父左京大夫顕輔卿也或拔よ清輔朝臣の歌の弘きを眉ひ〜ふ人
み〜いまとゝ〜ふと及ひ〜と覧る事ハ然とかまゝ歌めをて尋ぬ皆ゝとよ
まゝ〜ゝるゝ事ゝもをて例人侍ひ〜ゝもの歌よまんとそハ大事
いゝうと古書ハ人てゝゝいゝて万葉集ハ人とくゝゝを待〜

ふづゝ　日本紀ゝ長上と訓ゝ通雅ゝ長上八長直不番上也とゝ今ゝふひづゝ
也かゝ番ゝ勤ゝるを分番ゝも番上ゝもゝ○職事官長上官とゝふ事ゝ
職事官ハゝゝくゝゝ司ゝゝる役者ゝ長上官ハ散位の人長〜上〜て番を為
ゝる也ゝゝ○續紀ゝ播者菓子之長上人所好ゝゝふ最上ゝゝふ如〜

ふゞきゝゝ　世なかゝの長き別ハ杜詩ゝ已近苦寒月況経長別心ゝゝ
續後撰集ゝ
山鳥のゝゝ尾れかゝみてのゝ長き別のかけを為待〜
○死別ハゝふハ杜詩ゝ便與先生應永訣九重泉路尽交期ゝゝ草庵
集ゝ
人の世れふゝ別ゝハゝゝせん雲ゝくゝゝ鳥ハ本ゝゝ

ふゞゝゝゝ　神代紀ゝ長鳴鳥ゝゝゆ雞ゝゝふ也西京雑記ゝゝ長鳴雞々別品
ふゝ
わゞれてのゝ　ゝれふかゝけゝゝ泡ゝも成ゝゝんゝゝてゝゝたゝ形を為ゝゝ
ふゝゝみゞゝゝ　中臣祓の書ハ中臣氏掌る祝詞ゝゝを〜ゝ称ゝ古語拾遺
ゝハ中臣祝詞ゝゝ朝野群載ゝハ中臣祭文ゝ載ゝゝ延喜式ゝハ六月
晦日大祓ゝゝせゝゝれハ中臣の祓の詞ゝゝふてゝゝゝ○此詞ハ天智天
武の比ゝゝやゝつゝん天種子命の作ゝゝるゝゝふハひゝ事也○佛の経を
佛の前ゝゝゝゝゝゝ如ゝゝゝ其神の御前ゝ向ひゝ唱ゝゝハゝゝゝゝ
賀茂真渕ハゝゝ

△ゐぎ　神代紀ゝ諾とゝゝハ音と轉ゝゝる也奈良ゝ諾樂ゝ書る如〜○蕩
字とゝゝハ沫蕩尊の類也融和の義ゝゝゝゝゝゝ詩
ゝ魯道有蕩の蕩とゝゝゝゝゝゝ○倭名鈔ゝ水葱を訓ゝゝ古へ
菜茹ゝゝゝゝゝ新撰樂記に腐水葱ゝゝて万葉集ゝゝゝゝゝゝ

菜葱の訓ありて〜さゝ〜水葱いふこゝろ也あだい三才圖會にふ浮醬也とゝ
ゑ新撰字鏡まい荅をゝきゐだとゝあり俗ゑ水葱〜も沢桔梗〜もゝつ中國九
州ゑあるきゐ〜とゝふ駿河ゑ苦とゝふぎ〜ゝふ○欽ゑゝゐぎ〜もゝあり田水
葱〜ゝふもゝゆ田にはゝうゝるまゝ宇治拾遺ゑゝゝう催馬樂ゐもゝあり○枕
草紙に八幡の車書ゑゝみゆゑゑゐ〜ゝるゐぎの花乃みこ〜ゑ奉るなゝ〜ゝりてさ
〜ゝを〜ゝう○著聞集に成通卿熊野ふ詣て蹴鞠あり〜に夢中にゐだの葉一
枚得てまゐりゐゐゐて持ゝ〜事をゝる〜保元物語ゑゝゐめ王子のゐだ
の葉を百度千度かぎ〜ん〜ゝゝゐゐ〜めゝゝゝゝ夫木集に熊野の事とよ
める哥ゑゐぎの葉ゑみぎける露ふ〜ゝゝう熊野まてゐだをゝふい伊勢諸
尊ゑゝう出るゐる〜〜此ハ樹ゑゝだと称ゝるゝの也葉と力葉とゝふゝれが
〜〜其葉水葱ゑ似るゝゝうゝふゐる〜〜平家物語ゑ梅をゝれと竹栢也と
いゝう或ハ椰をゝゐむい二合ゝ意本義ゑあ〜を簠簋ゑハ橘とゝみ又椒とゝあゝう
山城宇治郡ゑ椒過〜ゝゐ村あゝう○ゐだの神祠ハ四條壬生ゑあゝう那義の
城ハ美作國ゑあゝ

なゝ紀さ　渚をゝゝう神代紀ゑ波瀲とゝ〜古事記に波限と書て此ゝの義也なゝみ
ぎいをゐぎさ〜ゝふいゝ〜さ〜同韻の轉也○渚の院伊勢物語ゑゝゆ河内交
野郡の渚村ゐ跡あゝう禁野も近〜土佐日記ゑ故ゝれゝゝ此ゝゝに故
在原のゐゝひ〜の中將の歌ゝゐゐゐる所也〜ゝ〜ゝう
ゐきゐ　神代紀ゑ哭者をゝゝあゝう古事記ゑ哭女とゝゆ今と紀州くまのゐ
ゝゝい死人ゐゝい賤嫗を傭ひて一鄉を哭て巡ゝう誰ゐる事と人〜ゑ告知さ
〜むとゝゝう
ゐぎゐ　眉尖刀の類薙のかゝゐの義のかゐゐゐ也薙鉾ナグの義ゐゐ〜今を
ゐゝなゝぎゐゐ〜〜称ゝる物ゐゝう其物ゝう生〜ゝる名成〜〜〜ゝゝう武備志
ゑ我朝の制ゑ刀の大さゝ〜て長き拵ゐる者ハ擺導の用ゐ石人と殺〜
つゐき物ゝ〜是ハ先導〜ゝふ〜ゝゝゐゐ〜ゝゝう中山傳信
錄ゑハ中山王の儀仗ゑゝ〜て長鈎と出せゝう今を假家ゑ先導〜〜
專ら打物〜称せゝう古今ゝゝゝに大將の持づき物ゝ〜て士卒の持づき物
ゑあ〜ゝゝ文治中奥州の戰ゑ和田義盛ゝゝとゝて國衡を射殺を畠山

重忠其首ヲ打とるゝうて義盛武功ヲ空くせ〳〵より弓箭の德衰て長刀と戦場の要〳〵と此後義久元弘の軍ヲ仕太刀討の勝負ヲ以りて大功〳〵すこれと討死の者多きよりも應仁の乱まいりて鎗とりて兵器の最〳〵せり〳〵

なきさはめ　神代紀ヨ啼澤女命あり露の神ヲ具也といつり泣澤の神社ハ万葉集ヨ〳〵〳〵り今も香山の畝尾のまヨおり〳〵ま〳〵ぬ

ふきなみのこと　伊弉諾伊弉冊尊准庶人之例天子不自祭気化之首ヨそ未五君主之道未有臣民之禮故ヨや

△ふく　語ヨまうふくおもいなくふるこらいふくヌぬ也○啼哭といつり○増一河含経に小兒以啼為力といつり○ようこびるれい源氏ヨ之ヨ今ようしふるこいつり○鳥にふくこらふも啼哭の音ヨ近き以りて也本草に林鳥ハ朝嘲〳〵水鳥ハ夜咬ヨこそ〳〵り○那久の里ハ隠岐國ヨあり小野篁ヶ流ヨ行て住りる形也といつり兼和の比也

ふぐ　櫛びよもいふげ棄る意薙とよむいふぐ拂ふ意○物事をかゝふ

ぐれこらふとふぐ見ふしらふと自他の異〳〵共ヨ櫛の条ヨ〳〵〳〵○海上の波平ヨ風穏ヨふるこるをふぐこらふい神代紀ヨ蕩とよめり蕩和の意也ヨて万葉集ヨ和字とよめり俗ヨ浮字ヨむい字体ヨよれと本義ヨわ以風ハ風止を二合〳〵る倭字也古今集ヨと雲とかくふぐこる朝の空ふれやこ〳〵ふり

ふぐし　丹後風土記ヨ此處我心奈具志注ヨ言語平善者云奈具志〳〵〳〵り平善ハ和也何氏語林ヨ杜書記平善といつり萬葉集ヨ心ふぐやとよめるとの多〳〵伊勢物語ヨ

大淀ヶ濱ヨ生てふこるかこふいふぐぬここふ行やと

ふくヨ　万葉集ヨ不の字とよめりふくヌぬ也ヨて古今集の紅葉あ〳〵ふくこを六帖にりみちあめよとこそ〳〵り

なぐさむ　神代紀ヨ慰とよめり平善の意令和の意也物思ひとまぐ〳〵かこて慰勞ヨるをいつり万葉集ヨ意遣の字又名草むと出るい義訓ヨ〳〵也ふぐさるるもこゆとふ反ひ也ふぐさこのこもよめり欸の詞物語類ヨも

なぐさめくるしてなぐさみといへる例なしといへり梳をよめるは倭の俗字也要は西土の俗字也

なぐはし　日本紀に妙美をよめり万葉集に名細と書てよしのよもなきの海ともつゞける花ぐはし香ぐはしなどもいへり後世名に高きといふが如し

○味(ウマ)酒鈴鹿郡奈具波志忍(オシ)山も倭姫世紀に見ゆ味酒も奈具波志も枕詞也忍といふ詞によりて名細といへり式に忍山神社と見ゆ野村にあり

△なげ　なげのなさけなげの詞なげのあはれなき物に見えたる無氣の義也そのすさびなくれ意源氏になげの汐筆づかひにもといへるは等閑乃義といへり茂字の意にもいへるなり古今集に暮るゝはなげの花のかげかはといへるは暮ともなくさる花の陰乃なからんやといかいしたる意也後撰集に

言乃葉はなげなるよりのいひなしよおもはぬためは君もあるらん

○早俗に友としよれとなげといへるは氣誼相投といふによひし

なげき　嘆とよめり霊異記に嗟新撰字鏡に悒となげくとよめり長息の義也長大息といふか如しよて嘆息ともいへり歎息はためらきと清く事也

歌に多く投木によせたり○万葉集に歎かひなしと見ゆかひ反き也○伊勢物語に花にあかぬなげきはいつもせしかどつれは愁嘆にあらず称嘆乃意也といへりさる例歎を俗になげくと心得たるは誤也といへるは哀嘆のことのみに覚えたる和語乃本意を辨へざる説也○又なげくとはねがふと思ひて長息つくよう神なとに深く願ふ意にも一轉せり俗語に此意に口語に願ふ事ども今いへり伊勢物語に千代もといのる人の子のためといふを真名本に齋と書ていのるとよめりいもふとよむべくやなきを古今集になげくとなるを此意也○投木は焼木といふ後撰集に

あふごなき身はたはくなげきこりつむ人はわれかは

枌(アラキ)投木斧(ヨキ)の三に寄たる也○萬葉集に氣長くとよめる歌多し同意也伊勢物語真名本に難心をなげくとよめり難は歎字にや○なげきの杜は大隅に在といへり

祢ぎ事をさのみ聞きけん社こそはてはなげきの杜となるらめ

是神とても願を可受ならずある事といへり○嘆げく猶あるをのといふ歌は蜻蛉日記に十月晦(ツゴモリ)かたに三夜ばかりさぬ時ありて二三日ぞかりありて暁がた

よいこたく付あり五五にくめて尚行〳〵しとおりひてこて北欧ゆうかゝ也其
翌日獨この松よりこゝふを贈りこるかこ〳〵こゝふてよきいこう
のこゝこゝこゝゆ拾遺集の詞云うちはあるこて女しこぞおきあこて角もふこ
いこう

ふげ〳〵　功程式よ長押こゝろ字のめ〳〵義塵ともむい非也義塵ハ天井板也
こゝろ江次第よ於長押上突右膝之後進源氏よあげ〳〵よ押こゝておこゝこゝ也
枕草帝よ一尺こ二尺ぐらゝ高さゝふ〳〵の上よおこ〳〵まゝたゝこゝて長
押い上下よあるこの也こゝこう物よ落こゝふ〳〵こゝこゝこゝ今らふ落〳〵
げけ也

△ふご　女を指てこう名兒の義ゆこゝふ如〳〵神武紀よもこゝふみぐふご
こいふまぐふごかこゝよあり○岐岨路こて草木の茂こゝこゝ兩後よ氷のさぐこ
こゝふふごとこいこて○伊勢國四日市乃あこうこるごのこゝこゝとこゝふて海こよ
忽然こゝこて城郭臺榭出現こゝる事あこう是蜃樓也史記よ海傍蜃氣成樓臺
こいこう必を春ゆ長閑ふる空よあるゝこいい和やこゝふる茂こゝ海の向ふふ

山里ふこあるこいい二里を隔つこいこと雨の前日ふこいい甚こ入渡を山里手よこゝばゝ
こ海上よ顯然こゝる事も東武ふこゝはまゝ〳〵ありこゝて安藝の嚴嶋こて蓬萊
の嶋こゝふ周防こそいい濱遊こも龍王遊〳〵もこゝふこゝこゝ此蜃ハ大蛤の蜃よあ〳〵ゆ蛟蜃
也こいこう越後こゝくい狐のこゝこゝふこゝ〳〵華談よ海市こゝふ如〳〵梵語よ乾闥婆
城こいこう華嚴音義よ龍所現城郭ともこゝゆ鬼見城ふこゝこゝ意也山上よ現こゝる
こ山市こゝふ漢書天文志よも海旁氣象樓臺廣埜氣成宮闕こいこう○名兒
山こ筑前よあり名子浦い越中よあるゝ

ふご〳〵　六月祓ミナヅキこゝふ夏越の義也閏月あゝば後の月こ用ふ〳〵きよう〳〵東
鑑よこゝこゝ秋よ神こゝふごこゝる意こゝふこゝ園大曆の説是也拾遺集よ

みお月ゆなごゝこゝこゝこゝこゝる人こゝふ茅のいのちこゝぶこゝふこ
千歳ゆ今このゝこゝい招魂の意ふこゝ〳〵古貴賤の人こゝふこゝ行こゝこゝふ
や新撰六帖よ

ふけゆこゝこゝのちまこゝに伊後〳〵こゝあきこゝこゝる村乃里人

○名越氏い小條朝時の裔也

ふごろ　波殘る家万葉集ニ難波ニ殘干のふごろと云て潮より出る詞

ふごろ　ふごろと何事ぞもなくこゝろを惜むなどいふ轉しいふる也さ是ハ名殘と云るも

あゝかゝゝ○餘波とよむハ長恨歌傳ニ云ふ長恨歌傳ニ云ふ元傳ニ出る○催馬

樂に風ゝもふいふいふごろゝゝもゝくさびこいつる扶ニなごろハ風の名なり

ふごろも同ゝこゝゝ新千載集ニ

吹こゝふあふゝの風ニ雲これてふごのとりこる有明の月

なごろ　萬葉集ニ沖のふごろとよめる波あゝく風あちくゝほのゝき浅

いふとらつゝこれも海の汐乃ゝく干こる時海の底ハい波の凝こるゝ如くてあ

るをいふ今の手そころをいふ是也故ニ餘波の字ふころゝ訓こるなごろと同ゝ今

海辺の人波の音のこるこをふゝころとらつる伊せと乃詠のふゝのいゝこゝ

とあるところふ本ニハい波取盧ニこゝゝこるふごろとよむゝ神代紀其矛鋒瀝之

潮凝成一嶋名之曰磯馭盧嶋ニこゝゝこるニよるこゝ元真家集ニ

伊勢の海乃蜑の釣舟去風ニふごろをこるいふ倭ゝ世

○土尤まそハ山中ゝもらつる長閑ふる意ニ

△ふさ　但馬ニ奈佐氏あり下総ニ口詰の子ニふさらとらふ

ふさけ　情をいふ真名伊勢物語ニ心中裂の義中心のさけ出るをいふ又心根

ともいふ心情實也伊勢物語ニ心ふさけこゝゝこゝ此國ニハいふけてふさけこいふ事

と貴つ中ゝらつなさけある人ふさけとくむふとの詞時ニ

あくれくふこゝ時つゝ友もうふ人乃情ハ世ニあゝこゝほと

漢書ニ財交者容財盡而踈徒然草ニ男女の情ひしてニ逢ることハ逢こで

止ニこゝうさとおりハあぐふる矣とかこち長き夜を独あゝ遠き雲ゐを思ひやり

浅ちゝ宿ニむこゝとこゝふこ千ゝ色好むこゝハいこゝめこゝと云ゆ新古今集ニ

花の下露のふさゝいかゝとあゝこゝ名ひふこゝめゝ去の原さ風

△ふゝ　無ニこゝあゝふのかニこゝこゝ有の反ウあるとりゝ不有也と注こゝ靡も因も亡

も未も茂もこゝあゝ毋莫も無と做て看あゝ揚子法言ニ曼もこゝあゝ浸とよむハ俗詰也○

梨祝訓せるハ奈子ハ音を謬用うこゝつこ中酸の義こゝこゝ磐梨郡を倭名鈔ニも

いふるもとこゝあゝ○水ゝ中ハ消梨也又青ふゝ中ゝ共ニ賞ニこゝ觀音寺松尾こゝと

こゝこゝ堅ふゝハ棠梨也こゝんごこゝとふこゝまふゝしハ加冬梨也又嶋ふゝあゝ實

少〻赤〻○日本紀に木梨あり今と一種〻〻と本草槙檀の一名に見へたり播州に然花梨といふ本草に云ふ美濃山中に姫ゆ〻あり形圓くてちゐさ〻そこに多く食ふ〻○新撰六帖に夏梨あり秋をとやまぬしよりくれい夏ふる熟するなり酉陽雜組に曹州出夏梨と云へり○伊勢飯野郡に一株の古木ありてくゆ〻ぶ〻とふて蝿聚ふゆ此樹の下に避て通行すとふ枝葉甚梨に似てちゐさ〻山ふ〻ふる〻〻實も梨にて丸くゑて小也ふゆゑいひ〻ゑ敷山の西坂に不實の柿ある事元亨釈書に見へ○枕冬帝に冬〻の玄世にて〻〻ゆ〻〻あや〻〻き物〻〻〻云云とろ〻〻にかぶりふれあり〻〻ゆとつ〻ふふる云云とゐふ和漢風俗の異あれい其好尚ふるふをまさかりきる

ふじゑ　詰字とよめり神代紀に見へ〻〻ふる新撰字鏡に見へ信鞠とひふぜるとよめり何とどぶむる詞ふる〻〻霊異記に諸見とふゐふじゑるとよめり

ふじむ　熟ふる意則深の義也ふ〻まぬ人を生客とふひふじゑる人を熟客とふゐり

なゝもの　醯とふ鰹鯖も同〻〻魚塩物の義也といふり新撰字鏡に鰹鯖を魚のもゝしゝもの今もゝもゝぶかゝといふり

なゝるす　名を名るを也

姓名を名るを也

〈なゝと　生成化作造為ふゝをよめり名より出る詞ふる〻〻文呉人謂作曰做ともゝ〻〻ふり○子を生をふ〻とふふ神代紀に汝所生児と見へ古事記に生成万葉集に父母ゆ成のまに〻〻竹取物語ふるさぬまるを〻〻とふり○古事記に鳴とよめり琴を彈ふを笛を吹ふをなと皆此意ふ〻〻ふる〻〻を也○物を偽て佛をこゝをとふふ字書に濟に成也と見へさを曲禮の疑事勿質も成也と注ふり○神代紀に如字をふ〻〻とよめり〻〻げふを〻〻ふゐの義是也万葉集にも多〻〻とよめり古語也○古事記に〻〻とめのふゆ〻〻〻成と見へ万葉集に成とあらふさるをとゞ〻成といふいさをの義閉とふ也○奈須浦は伊豆國ふり○那須野は下野國ふり頼朝公〻〻に獵をさゐ〻〻那須国造の碑は湯津上村とふふ所にあり高さ二尺三寸に幅九寸碑文九八行

あり一行十九字あり都て文字一百七十二字あり白紙不分明○古事記の哥よ
いふさんとと足ゆ寐者將宿也下の欠よいをしふせしもいつ万葉集ゑ枕ど巻
てふせる君かもと足ゆたなせるい寐るる也又やをい〳〵ふるぬい安寐し不今宿
也又入來てふさ孫又ふ寐らん妹と又安寐し不今宿又安宿勿今寢と足ゆぬ
てふ言いふね孫通して活用をるふり

△ふせ　神代紀ゑ夫君尊又夫君をふせのみこ〳〵よあり名兄の義ふ〳〵式
の祝詞ゑ名妹万葉集ゑ名兄の君と也り○古事記ゑ哀祀命御兄を指
て汝兄と詔ひ神代紀に吾弟をあがふせとよみこり古事記ゑ我那勢命と
みを世義いいろせの條ゑて考〳〵○俗ゑ何の意ともらふそとせと通音也古き
物ゑふせうくもゑ〳〵こり

△ふぞ　なふぞの略也あやしミとがめる辞欠ゑ思ひ〳〵やふろ意〳〵をやゑ
そともなぞもかくともゑ〳〵こり○ふこ〳〵をこふゑ同〳〵さい皆とうあく
嘆をる意ゑり何い曷也實也悪也と注せ〳〵ゑ如〳〵
ふぞや　何那の義今ゑんぞやこ〳〵こり

なぞく　謎辞欠ゑ何〳〵の義也拾遺集ゑふぞくがこりとゑ〳〵こり
又枕草紙ゑふぞくいかくをしりるとゑもふぞの欠合こらふ事もありとん
ろふぞ欠解欠商謎ゑ〳〵こり
なぞらふ　擬又準欠ゑあろふみころ〳〵ふの義也新撰字鏡ゑ僭をなぞらふ
とあり真名伊勢物語ゑい諷をよあり○庭訓ゑ準絹準布とあるい絹布
ゑ准して銭を納るぬこ〳〵ふ
ふぞ〳〵ぬく　伊勢物語の欠ゑ〳〵ゆ無准の義比類せを高卑比分ちふく平
等ある意ゑ〳〵こ〳〵ろ万葉集ゑ花ゑふぞ〳〵てもあり又燈と月夜ゑふぞ〳〵と
〳〵ゆ並添る也
なぞ〳〵〳〵うた　古今集の序ゑ〳〵ゆ比の体也とい〳〵彼ゑふぞ〳〵〳〵て世を志〳〵
もる也
△ふく　日本紀ゑ鈴字欠ゑあり難断の義ふる〳〵大神宮式ゑ鈴儀式帳ゑ
奈太作り字彙ゑ鈴平木器とゑ〳〵こり全淅兵制録ゑい斧を訳せり○那
多城い加賀國也富樫介ゑ居〳〵處也○新撰字鏡ゑ鉞をおふくとよあり

蝦夷より鎌倉へくるくらん斧をもちてうちたふ

ゐぐ　洋をいふ仙覚説に波高の義といへり神代紀にいふ名門の轉せる

ゐる〳〵　難字をよむいあ〳〵〇伊勢物語にゐぐの塩やきとあるいせ国の

ゐぐ也此所より出る舟をゐぐ舟といふ塩竈のまつぞ大船のよるとし湊

ゐれと此名のこゝろ廣田乃社合に

詠〳〵天津雲かいなぐ舟のこゝろゆくえをあらきものと

〇壬生の忠見の幼名をゐぐこまといふよし袋草紙にえて〳〵

ゐぐむ　神代紀に容字をよみ又宥字とよめるゐぐめるとをしふめる反むせぶこと

ゐぐゐる　中臣祓にさくゐぐ万葉集にゐぐれ降る雪とえゆ長歌の義成〳〵太

平記に人雪頽なひくゐぐれとよめるゐぐれの義訓せし也雪なだれよりゐぐる

ゐぐらう　朽をよめるなぐるゐぐれ意也源氏の物語に日本紀を引て平字をよめること

所見ゐ〳〵心めるくゐぐらうなる人にてしらう〇童は水ぐきと歌の五文字に

ゐぐらうゐれといふるい古を諺也

ゐこゐ　名をたてるは義也後撰集に名をゐる宿源氏にゐる春ゐこゐ

〇名たてゐるゐも同〳〵

△ゐち　紀の熊野の地那智あり社記に難地といへり一説に後の義新宮本宮

より後ゐる意なりとも〇ゐちぐらとゐふ那智の濱辺に出る試金石或は

碁石也試金石をけいしともいふ

△ゐつ　夏をいふ熱の義也とも成の義也とも一説に成臣の義稲をよりて

の名也

ゐづ　撫字をよみ日本紀に摩字をもよめりゐづるともいへる反つ也〇齋宮

忌詞に方と撫をいづこゐこゐ

ゐづき　倭名抄に脳とよめり古事記にゐづの田にくゐ歌にゐづきの田とも

よめり地名成〳〵〇梵家に祈願の時脳をくゐぶて芥子に入香のけむりをや

もしらまくも

ゐづな　薺はよめり接菜の義をすゐ意成〳〵新撰字鏡に甘ゐづるしよめり

又蔊はゐづなとよめるは心得がたし〳〵〇倭名抄に草蘆をいづなゐと訓

せりこ〜ハ葦の芽なり俗よ犬ふつれくらふ西土よりも物葦こいてり又あしハ
面の芽なり管子の注よ陰陽之分定於吉則有甘草生葦是也定於凶則苦
草生葦薤是也とゝ〜う○おなるほ物ぬい新蓂也大葦の名本草よえいう
俗よ球〜ゝふづれ又ちく〜ゝ江戸よべんく草又さみせん茅ゝふ實よ
るゝ名也

ふづむ　万葉集よ煩とゝみ常に泥滞といり万葉集よ父母よ不令知子故三宅道乃
夏野草手菜積來鴨とゝ也此文字の芽なり古事記ふゝゝふづゝ仁徳紀の歌
よ難波人鈴舟ゝゝせ腰ふづゝとゝあり源氏よふづゝてなまむつがりゝらるも煩
字の意なるゝ〜○古事記の哥ふあゝものりゝこ〜ふづむ又うみうゆけばゝし
ふづむ万葉集夏艸を腰よふづゝてなゝらふハ浅蔭原
海水の行夏草霍雪ふよ腰ゝゝて没といりよて日本紀よ暗堅庭而陪股と
古事記よハ踊ふづゝゝゝるなるゝ〜といり○日本紀ふ頓轡をよあり馬のふづ
むとふも○俗ふふづふむゝらふもなづゝふむの芽と訛るふや
なゝゝ〜　遊仙窟よ娉婷をよゝ文選ふ嬋媛とよあり源氏よ花のよるひ

ふつ〜〜ふよとゝゆ馴著ゝゝゝゝ也懐をふつくゝとよむ意也しいゝもゝの略也ふ
つくゝ馴と狎もよあり

ふづゝふ　古事記の歌よおゝふふづゝひ万葉集よふやぐりのなづゝひゆけいゝ
もゝよふふづゝ鴨とゝとゝとよあり泥ゝ障る芽なるゝ〜新撰字鏡よ蹈と
ぬゝふづゝふゝよあり○源氏よふづゝひつかうまつりゝ孟津よ眺近とよむゝゝ
と馴むつゝゝ意也神樂哥よふづゝりるともよありいふ又ふ也宇治拾遺ふよりをが
らゝゝゝふふづゝふよゝゝもゝゝゝゝり

なゝゝゝふく　萬葉集よ夏麻引とゝゝゝゝゆ麻六月よ収て皮をむよてをゝゝゝる也くふ
とづけるゝ所嬰の芽也よて麻を引ゝゝゝもよあり一説よ根引をる畝ゝけゝけ
ゝる也ともいふあり又夏麻引命鞆貯ゝゝもゝゝゝゝゝ命鞆いうふかゝゝとよむゝ
日本紀よ令をもうゝるる意也貯いたゝてゝよむゝゝ夏麻を引所嬰て貯一畜ゝ代
頭をゝるゝゝて思のつゝをゝるふらふうけゝゝるゝゝ

ふづゝく　白氏文集の隨分をゝあり言き朗詠よいゝふゝくゝと点せり真名伊勢
物語よいゝふゝくゝよ隨分ゝ墳ゝゝれいづゝゝゝ謬れる成ゝ

おつびきのいと　糸に春こがひして夏引るの也といつまでも夏川の糸にとあり又夏子に糸也といつて

△なでで　伊勢物語に云つまもめをおでかきをおであまの竹株物語に めをきる衣にふくみてをん朗詠集に中くに消いきえをおて埋火のごとくにうち皆第四音の下にてをおでにいふ今の口語にくめえでかんえでといふ是也又おて反祓也

おでもの　撫物とは人の身を撫て祓ひ棄る物具也日中行事に下賜の藏人臺盤所にて御おてもの出して衛士に陰陽師うらにたちて出て続千載集に御おで物の鏡とは六月の菅貫をもいひ堀川百首に

麻の葉をおりふ事といおてつけてくるつきけつる伊祓そぞする

撫喰（ナデウクラ）人形とは人形をもつて源氏にかの人形のごとくにひ出て

えん人のうとうとあつい身にふれて恋しき人のおくものよちん

○猫とおでものこらひし事もえん少

ふとこころの内にたにふ事おてにとの忌きめてんにかの乃小野

おでふこと　何とふ事の義也何條の義とまるいあらし清女納言に云むてふこと

あきの人のもとにろにえがうまてあらひふるとにうち一説に真名伊勢物語に名伝言無久とにれい名ある人もあるきるかとうて○紫日記に云てゆ女のまるかふこと

にゆ東國に今もおでふ又あてふこうて

おでんのさくら　南殿櫻也源氏に南殿の櫻乃えんとあり玉葉集にもとにうち南殿ハ紫宸殿也紫宸殿の巽の角にあり大内草創の時の樹なるよしにて花ハ皇也一説にとと梅なるとにて承和年中に枯られ櫻に改めさせられしい仁明帝の時より也にとにうち天德燒亡の時ハ重明親王の第より芳野の櫻に移させるふ

○俗に左近の櫻右近の橘とうふい禁秘抄に康保二年仰左右近府被移にて続千載集に南殿の櫻を本府より殖侍る時大内の花のごとにて結られい左近大將為教

古人の雲井のさくらたにあるいと又去に代るさくら

○奥州にていい伊豆さくらにかかるいうて南殿の名を月にん

△おで　日本紀に何をとありおでうとにもたくうとにもにくうおでとにて

おとらふも同に俚言に云せおとらふ○諸未にうふ葉字の義也杯ハ字書に本

義にあしそこれ後世の辞なるべし或はやど或はねぞといふは方言なるべし○神代紀に名門をよめるは速吸名門の類是也

かぐろ　古事記の歌にみえ平和の意俗におごやかなる事ぞなどやうしとをんどりしといふ是也万葉集に和妙のごとよめりのしろしといふと同し

△なゝつ　七をよめり名成津なるべし廣韻に名成也しるしとみえ神代記に造化の紀と記して神世七代といへり千一疏に人生七七四十九而魂魄全人死七七四十九日而魂魄散時七則回日七則復といへりしらう三葉四葉に殿作りといふも七の数を取といへり○大同類聚方に七ノ薬あり揚毒瘡湿良方也舟史惠丸得此方於肥直信則家也惠丸ハ六之朝庭而以来掌薬官據此方得神験者太馬三韓ノ客斐清高傳之於吾朝帰而成名科送吾使帰朝上奏曰貴界涷薬斬岐之不及神方又云瘡氣至為損毘者麹白毒共為霜熱粥之上置之毎朝食之必治更神妙也

なゝよ　天神七代地神五代の目ハ始て紹運録にみえ天七地五の数に配する也されど神代紀に神世七代といふ事はあれど地神といふ事はみえず況んや天照大

神より地神としきれるに待る新後撰集に太上天皇
ちはやぶる七代五代の神代より我葦原のり治をまもれまさ

なゝめ　斜ばよめり七眼の義なるべし七ッ時になりて日かげの傾をみていへる詞なり是を斜日といへり日西に斜なりといへるより俗に盛衰ば不斜といふなり

なゝこ　魚子の義なるべしあらゝのこともせうちたるごと彫りたる也といへり本草に如魚子形謂之粟紋とみえたり

なゝたり　欽明紀に七織帳あり童謡におり月さよいくつ十三なゝつなてたうまた七てといへり月行十三度十九分之七にて十三七つといへり七織きさくしとは酉陽雑俎に月以七寶合成といへる意なるべし

なゝくさ　正月七日七種の菜羹を用るは年中行事簒巾抄なとにみえ此事を載せたりといへり寛平年中より始るとなといへり今水無瀬家より献る康富記には文安五年自山城國綴喜郡大住献七種菜とみゆ荊楚歳時記に人日以七種菜為羹とみゆる文に拠ても七種の名を著されよて古来其説區々なりしに台德大相國の時に諸家に命し其故實を討させたまへども一決しかたし

をもて世俗用來まるを採用つきよ〜仰也とらう七種ハふづれとぐ〜せりあさふ
ごぎやう〜ちぐさろほ〜けのざ是河海抄公事根源ふ〜の說也歌林雜木抄ま
せるふつれ御形田平子佛のさ〜れす〜ろられうせ〜さ
とえゆき〜ふい即菩也或說ま田平子〜佛の座ハ一物也又かり〜けふ〜らふ〜ら接
囊抄の歌ま
をりたろふ五行たろ〜こ佛の座あ〜れみ〜ふ〜こをそ七種
こえ〜ろらあ〜ふい菩也こ〜ふ〜い卷耳也各條の下よく〜く〜え〜ろ慈鎮賀
茂社七首ま
ろふそ〜ふつれこぐ〜芹つ〜てこやセ〜さのとものまふ〜ん
○構津國菟原郡中尾村の人生田ハ濱まて若菜を採て京に献る七種の〜ろ
是を生田乃若菜と号ハ構津志ま滸蔬と〜ろ〜ろ○伊勢神宮ようれの七
草ハ七見村より奉る齋宮旧蹟の北也式ふ多氣郡奈々美神社ハ少七真草ハ略
ま〜万葉七相菅〜同〜○七種と少こやと手ハ歳時記ま正月七日多聚車鳥
度家名槌門戸滅燈燭禳之と〜ろ鬼車鳥ハ鵂鶹也〜ふ〜ろこやと詞ま

唐土の鳥〜ふい是と指也○七種の粥ハ延喜主水司式正月十五日供御七種粥
料米粟黍子菫子稗子胡麻子小豆〜ろ〜ろ拾芥抄ま大角豆菫子署預ま
て稗子菫子胡麻子ふ〜公事根源ま大豆栗柿豇豆あ〜黍稗菫胡麻ふ〜
十五日粥と食ふ事ハ十節錄ま又〜ろ○七夕の七草〜ろふ萩尾花葛常夏女
郎花藤袴朝貞也とらふいつれとセタの歌ようと合せろ秋乃七種〜もふ
雅世
ちちろあひて秋まろ野〜の七草ま先〜ろ〜ろやたく〜この花
万葉集ま
秋の野ま咲ふる草とよを折〜かきろ〜ふ〜ふい七種乃花
一說ま梨桃大豆角豆熟瓜茄子薄鰒也〜もて〜ろ
ちちろ　萬葉集ま〜ちらふ小野の七相菅〜て〜ろふのまぐ〜も此類語ま〜ふい也
の略也一說ま相をみ〜ま〜て七つの真菅也〜ろ〜ろまて此歌月ま詠〜月ま七つ〜ふ
ふい詩の終日七襄の意ふる歟〜
ふつとのて〜ふ　七弦琴也東舞の歌ようふ〜つとのやつ以ハ琴テ〜て〜ろ階音樂志

と琴、神農制、爲五弦、周文王加二弦、爲七者也、しかり五弦ハ宮商角徵羽二絃ハ君
宮ハ商也

なゝせのはゝ　日中行事ハ七瀬の御ゝゝ日次を撰して下屬の藏人ゝゝを
河臨の御祓ともいふ建暦御記ハ陰陽師進人形主上懸御氣撫身返入打植と
いへり年中行事ハ七瀬御禊ハ川合一條土御門近衛中御門大炊御門二條末後
冷泉院御時隔月被行靈所七瀬御禊ハ耳敏川々合東瀧松崎石影西瀧大井川
なゝせ又本ハ難波田義嶋川後大島橋ハ島佐久那谷幸崎此を大七瀬といふ
もなゝせ七瀬の淀嶋上郡ハあり金葉集ハ

知きやかの三潟ハよ神ひちく七瀬のまに思ふこゝろを

一說ハ桂鴨鳴滝雷鳥難波志賀鈴鹿ともいへり禊ハ齋王郡行の時鈴鹿川
を七瀬乃一所なり又鴨の七瀬川といふハ宮川羽川石川瀬見小川月輪川御手
洗川大井川なゝもいへり関東にても元仁元年始て靈所七瀬祓の行ありを
事東鑑ハ七瀬由比浦金洗沢国瀬川六浦抽川杜戸江嶋也
あしひこのゆ　誕生七夜ハいへり或說ハ野ひこ甲斐國の所の名也其所の米城

めしよせく粥すゝて七夜くハ産所ハ用ひしかり堀川院第三百首ハ
君ハ代を七ひこけのゆなくかりしかしかりそやゝ
あつこのゆや　日本紀ハ七枝刀をあつこのたちとよめり七枝燈の表なり一一六
帖ハ
なゝつこのさゝろろくはゝゝつ我とカふゝを行あり
あゝくまゝて　松草紙ハ稲荷の事ハしかり一日ハ七度詣る也拾遺集ハ
流のゆゝてもゝ侍いらあり山七日のゝゝゝゝなりゝ
此神社ハ七日詣ゝゝふ事ハ証也今ハ諸社ハゝりて七度まゐりゝゝる
也稲荷山上中下の三峯ありて稲荷神社の故趾也又泉ありて下流瀧ゝゝれ
ゝ後撰集ハ
七夕ハ天河ゝ波七ゝゝ後のみをゝ伝みをゝ世よ
とよめるを七度の祓ゝゝ也ゝゝ後一條院の時七度の祓ありしゝ事野府
記ハゝゝゝ〇俊成卿加茂ハ百度詣の事新續古今集ハゝゝ
△なゝよ　霊異記ハ昌とよゝ常ハ何とゝあゝあゝふゝふ如く発語の詞也俗語

に甚字又甚麼什麼をよむも亦同じ顔師古か説に何等物といふを省促め
く等物とし等の轉音丁兒反なるをもて根本を詳にせバ底字に作るハ非
なりといへりなにせんなども同意也なにさまなどもいかさまなどいふハ時字
意なり杜詩に晩渦鷺浴底心性應璙百一詩に用等称才学○万葉集に
何の意に名娣ともかけり

なにも　日本紀に妹まに汝妹と訓せりなれとといふの義也のハ反ふ也

なにがし　何某の義也何かぬしの略源氏になにがしくれがしとかいへんしも何
それといふ詞の意也又なにがしの院なにがしのよけたなにがしの念佛などなにがしの僧
都などともいへり又自称にもいへり

なにそれ　何それハ也なんその義によめるハ後の朱にやいへり建武年中行事に
いまはなにそのあともなしと云ともみゆ○古今集に
今やまなるそれハ露のあくあ紙にいふすしへいをしかりなくり

なぶれ　何是といふの轉語成一し源氏になよのみこれの源氏といへり

なにはづ　源氏にまで難波津をだになかくしかつけ侍らざめれバといひ枕草

紙になふれわりれにほかしぬも事にまくすひて云をといへり古今集の序になに
はづの言の葉をまかすんの人乃はじめにもかりしありけるにて手跡のまでなる
をかくいつるなり

なにしおふ　菅家万葉集に名西負とみゆしハ助辞也名に負といふ事ハ
万葉集に名尓負と云り日本紀古事記万葉集等に多くみえしたり名におく
るとも見えり

なにならず　俗に何ともならぬといふ意又何でもないといふ意歌によみて心
得べし

△なぬし　東鑑に小草井名主紀六久重とみえしたり名田を帯せる主といふ義
也今も坊正里正をさへいへり鎌倉の始官位なかりけれバ多く田畠をもち廣
く軍役を勤むる者ハ大名といひさを少き者を小名といふを此義也といへり
新猿樂記数町戸主大名田堵とみえしたり又名主職といふ事も鎌倉の代
にみえしたり名主百姓ともいへり

なぬか　七日といふなぬかの轉せる也○神社に七日参詣の事七夜詣の下にみえたり

より○誕生より七夜しるし追福には七日しるしふよし玫山公の説也拾遺集に
うぶやの七夜とみえたり○針灸藥治及温泉に浴するにも七日を一廻りとすること
我邦の法なるにや○七夕をよむかしとよむは後俗のあやまり也古書にてはなぬかと
よめり一万葉集に一年に七夕のみ相人とも今の七夕を候こせぬかともみえ
たり七月七日の夜をいふ七夕と呼は重三重五の例の如し○思の終の日記に七百
首の詩七百首の歌七調子の管絃七十韻の連句七十韻の連歌七百の数のまゝ七献の
御酒也とみえたり○凶事に七を用ゐるは鎮火祭詞に石隠坐旦夜七夜晝七日といふ
ゆ千一疏の説の如し○万葉集に久なれは今七日はかり早からは今二日計とみえ
又ちくあるは今ならぬあかなくあるはなぬかれ円ともいへるは数の字を三以上七
以下と釈せしか如くなるにや

△なね　日本紀に姉をよめりあねの古語也又なねとも見えたり万葉
集に名姉とありまた妹名根ともみえたりされは男は其姉妹いつれをも
なねと呼は古への通称なるへし古事記に那泥汝命ともみゆこれ神沼河耳命
御兄を指てのたまへは兄をも称せし也

△なのり　日本紀に稱又言をよめり實名をいふ名を告る義也名告の字古事記にみえ
ゆるなのるを体にいふ也源氏にもなのりするとみえたり新千載集に
九重やちよ紀をちりみましおしてなのりを呼は我は更なり
これ時まうしの事也○堂上かたより禁裡へ献上の目録には称号官位なく實名たゝ
一字を書也下の一字は假名書也下け札の時も同し○古へ男女はしめて相逢の時
なのりては妄に名のらせぬ事とみえたり万葉集に名はらひてしとあはれけんや
わかよみ雄略天皇もまつ名のらすとよませたまへり○ほとゝぎすの名
のりするとよむは我名をよふ故也といへり

なのりそも　允恭紀に名のらそを委くみえたり万葉集に莫告藻とかけり正義なるへし
後拾遺集に
いそなつむ人はあまたにゆるせともなのりそこそかかれさりけれ
漢語抄に神馬草とあるは莫騎の義也大唐俗語要略に他馬莫騎とみえたり
本朝式には莫鳴菜なつそくと倭名抄にみえたり源重之
ちはやふる出雲の宮乃神の駒もなのりそやはみちさらん

是なはしろを物名によめる哥也今の穂俵也

なのめなれ　源氏物語に見ゆ大服なしぬ意といへり斜なしの義なりや○新撰字鏡に嚥はなのめなりあまなる切なる意によて魚の目は斜なりや魚昏夜目を合せず眠らざる者なれはなり右京大夫大原記なともなのめならんと見えしなり

△なは　日本紀に縄索をいふ直き義縄墨の意也詩に其縄則直と見えたり霊異記に紲をよめり○ニツぐりハ斜三ツぐりは縄也といへり○早縄あり腰縄あり火縄あり細縄は神代紀に見ゆ○難波浦を縄浦ともいふ万葉集に見ゆなはハなみハの略なるへし

なばり　日本紀に隠字をよめりかくるゝ古語といへり万葉集にもなさつものなばりもよひにあひてあしたおりなゝ隠(ナバリ)にもよめり所の名にいふ是也或ハ名墾に作る伊賀の郡の名によれり名張八郎太平記に見ゆ○大和の地名の吉隠(ヨナバリ)も同し

なはて　和名鈔に畷をよめり縄手の義直なる道をいへり藉田賦に遐阡縄直迹

陌如矢と見えたり字書に畷ハ田間道といへり氷ぬくは眺とも田間畝を分つ巷と畾といふ○四條畷ハ河内国讃良郡也楠正行身正時と高師直に拒き戦死せし地也正行生年廿二といふ

なはしろ　苗代と書る稲種を下す所にて秋田也凡て代はつけいふ語日本紀に草代廃訓往来に束代も見ゆ能因法師

天河なハ代水にせきくだせあまくだります神ならば神

祈雨のため伊豫の三島明神によみて奉る歌なりといへり伊勢朝明郡に苗代神社式に見ゆ縄生(ナハ)村にあり苗生の義也移田神社ハ苗代の田といふ埋縄村にあり移苗の義なるへし○薩摩に苗代川といふ里あり朝鮮征伐の時韓人を擒にし来て居しむ今子孫に至ても八歳まてハ韓語を習はしむとそ○近江にて鷗を苗代鳥といふ苗代時に出るをもてや

△なびく　靡字をよめり又靡と同し萎(ナエ)引の義なりや○なびやかも義同し或ハ縛字をよめりなびかしとも見ゆ新撰字鏡に娟をなびやかなりとよめり○秋人名曳青墓の傀儡也詞花集にみえたり

なびと　日本紀に汝をよめり名ある人といふが如し

△なふ　行をおこなふ養をやしなふ兄をまじなふ占をうらなふ商をあ
きなふ荷をになふ損をそこなふ伴をともなふなど猶多かるべし○索綯をなはとよむ糾とあ
ざなはるとよみ委をたくなはるとよむをいふなるべし縄にも糾の義也されば
綯もいひなふは通也

△なふで　典籍便覧に名帖をなふでとよめり袋草紙に名籍をなふでとよめり古今著聞に仁
平の比宋朝商客劉文冲東坡先生指掌圖二帖五代記十帖唐書九帖名籍をそへ
て宇治左府に奉るといへり儀式帳に歴名をなふみとよめり

△なぶる　霊異記に嬲をよめり弄也と注せり狎ぶるの義也東國にいぢる又
なぶるといふ夫木集に

こひするひともおほかしなきそもかくなれ池をなぶるなぶるくをむ

△なへ　新撰字鏡に苗をよめり名生の義なるべし万葉集に秧をよめり

△なべ　倭名鈔鍋をよめり霊異記に鼐をよめり日本紀に鼎をよめり魚瓮(ナヘ)の
の義なるべし又なべとものよめり江戸にくちなべといふ新撰

字鏡に鐺又𨫼をなべとよみたり心得がたし○万葉集に刺なべ又倭名鈔
に鉄鍋をかなべと訓し式に合鍋あり鎗をあしなべと訓せり土なべは
袋草紙に見ゆ字鏡に鐢をさしなべともよめり一類なりや○なべぶたは
鍋蓋也安房にかぶしといふなべづるは鉉也説文に鉉は挙鼎也と見ゆ堺の南
に一路庵あり一休来りて萬法有道いかなるか是一路と一路言下に萬事皆休
ましいぬと一休と答られし手取鍋一つを窓前に掛て食をこふ一首の
歌あり

てしるめよおのれのまゝにのきしてはてそさふをいくとくみなるる

なべて　並字をよめり万葉集古今集に多くみえたり別物(コト)と相むかへて多くいひつ
よそ萬葉集に共字従字なとをよめり見るなべに妙なへに花ちるなへになりむし
なへなべてといふとかんとなし心得るべし万葉集に

さくら花今さかり也難波の海おしてる宮にきこしめすなへ

常とらしなへとよみ宜(ヨロシ)なへといふも並の意也といへり一説になへむしとやゆまれは
傲は象也学也とある意也ともいへり

ゐづて　万葉集ニ亟とよめり菅家万葉集ニも推鍋而〳〵ゐまつる俚言の引くるあて也或ハ一切をよめる

ゐぐ　倭名鈔ニ蹇とよめり足ゐぐ〳〵もつて史記ニ詳為足疾と云〳〵ゐ萎と偽もつて混ずる〳〵寸跛も同〳〵

〈なびく　猶字尚字ハ既字と反對せる意也仍いうて〳〵ぬ意也扨ニまぐ又やうく〳〵ふ意ゐも用ゐる上世より源氏物語の比まくらはまぐてふえの〳〵也久〳〵み月のうつ〳〵も秋ハ猶とよめるハ猶ハ似也〳〵注せ〳〵う如〳〵又いよく〳〵ゐ意ふよめる扨ハ後の事〳〵言歌ニ云て〳〵どもらつて猶と還也〳〵注せ〳〵意もあり又儀禮の注ニ猶者有故之辭と云〳〵ら俗語ニふれてもとらふ意ゐるもあり後世ゐ式と書て万葉集等の言書ニ例ふ〳〵〇むと同〳〵傳燈録ニ如湯消氷尤別有水と云〳〵ら犹ハ猶の異体〳〵文章ニ猶尚〳〵も尚猶〳〵も用ゐる〇万葉集ニ黙然不有をあれあり〳〵とよめり源氏ニも此詞あり又たゞ〳〵もよめり又たゞびとを直人〳〵もよめり又同集ニ猶哉〳〵とよめり拾遺集ニ

さき〳〵ゐるあやうう云〳〵うもれいとゞ〳〵や思ひあらぬる

伊勢物語ニたゞふあやハあるべき〳〵ふ詞も云〳〵ら真名かゝ直哉〳〵ゐり只ニのあるべき事ゐの意ゐり猶を可止之辭と注するに近〳〵又色このゝの扨ニハ直ゐをありけるハ只扨ニらふゐり〇あゐの云ハ直ニよめるゝらひてトニ分ること万葉集ゐ〳〵ゐる也〳〵古今集の今かゝ秋ハ狩て云つゐ云ハ後ニ書誤もゐる也古本ニも家集ニも此扨秋字をハ〳〵云ゐを後世ハ誤て〳〵云て〳〵く誤もゐ〳〵

ゐあ〳〵　直字とよめり猶と家通ゐて猶をゐあ〳〵〳〵もよめり神代紀ニ云〳〵少〇直衣ハ倭名抄ニ襴衫ゐあ〳〵のこゝろもこゝ〳〵ら裁縫の制もゐ〳〵位袍の如〳〵古華族乃公卿〳〵ら〳〵もゐ〳〵くゆうゞと近代先例ニよりて勅許ゐり無襴直衣も物ニ云〳〵ら常ニふふのゐ〳〵ゐ音の如〳〵天子ハ直衣ハ小葵中納言宰相等ハ臥蝶中将ハ光文皆内衣也〳〵ら又小直衣ゐり狩衣直衣〳〵もいう源氏ニ〳〵ら〳〵ゐの綺の御ふゐ〳〵云〳〵ら〇引直衣ハ天子藝の御服也と云ゐり禁秘抄ニ有帯昔ハ只引欲〳〵云〳〵ら御直衣御張袴着御と引直衣と云ニ冬者白浮

織物の小葵夏者生の二藍花田三重袴公卿の夏直衣同半臂同指貫
文同とも桃花葉葉ゝ社参之時不可着直衣神体必直衣にて現し
給之故也とゝ〇束帯色目ゝ烏帽子直衣ハ大納言以上参院
時著之但可蒙勅免於私者依便宜用之元子細大井川逍遥之時藏人
頭着烏帽子直衣其外元例とゝ〇梓巫と中國にて呼て播磨ゝ
ゝゝゝゝゝゝ

ゐやを　神代紀ゝ矯字とゝあり常ゝたゝゐゐをとゝて人々直の意
也よて言事記ゝ直もとゝあり詔雖直又見直聞直ゐゝとゝめりしい悪きを
善ゐを事也〇書籍ゐゝの文字章句をとゝたゝゐをい纂括とゝめ

ゐゐゝび　常ゝ直會と書て續日本紀ゝ猶良比の豊明ゝゝひ延喜式續日
本後紀ゝ直相ゝも出せり建武年中行事ゝゐゝあひゝとゝゆ日本紀葬于殯
宮乃賞字をゐゐゝひまそゝとゝるゝ釈ゝ訓とる其義ゐる〇〇直會院ハ
神宮ゝ在て五丈殿四丈殿九丈殿の三間也儀式帳内宮四丈殿兵範記作主
神司殿外宮五丈殿神事供奉記作主神司殿

ゐゐざり　等閑とゝあり千家詩の注ゝ尋常也とゝゝゝ直ぞゝの義
ぞあ反ぎせるゐゐい即まつねのゐゐゐ人とゐゐ人ゝとゝゐゐ如〇一説
ゝゐゐゐ

なまじひ　懇字をよめり生強の義なり万葉集に奈麻強しとあり左傳注に心不欲自強之辞とかけり俚語のせめての意也

ゆまめく　遊仙窟に婀娜嬢枝に窈窕とよめり真名伊勢物語に媚字又妍字嬌字とかけり字書に媚同妍とかけり嬌い言若不出とかけり艶媚と含むよりも生めく妍也拾遺集に

あも鳴く舟もかよえぬこの海のいくかあるらんこの海のあまめかるらん

尼の媚めくを海人の生和布刈よりひかるる也かる反くも男女に通じいふ詞とかけり

〈ふる〉　並列とよめり雙とかむい日本紀霊異記にかけ相とよむい倭名抄郷名に

かけり貫之集にふるくとかけるかふるびはくも○次とよむい年次月次日次の類並の義也○波浪とかふい鳴水の義なり〇ときわぐとかけるくらふ

静かなると波ふしともいふ○坂波折とかふまあり逆波なりあり○日光の波ようなると金波といふ○浪の花い似ることとかひ波ハ雪い降ることかふ也○れ

かふるい濤とみふい倫也○名に祕とよめり橋に祕樹あり

なみだ　神代紀に浪穂とかけり万葉集にかのとよめり神武紀に浪秀

ともかけり浪花といふる如し

なみだ　涙とよめり位水垂るの義なり新撰字鏡に汕とかふもぐとよめり今

もあんざるもいふり万葉集に恋水とよめり○涙の玉涙の雨涙の滝涙

といふるくる辞也涙の浦菅方に見ゆ古今に涙ハ床とかけり楽天の詩に

夜涙似真珠雙々墮明月とかけり伊勢物語に

我世とハかふりあるとしまりひのるくれ涙とかけり高々

又ふみくれ涙ハ日向國にあり

ふるふるく泪の涙に雪ハおりひに降て消めとかけり

○泪ハ字彙に與涙同とかけり○ふみぐ川ハ詩にも涙川と作り世説に

も涙如傾河注海とかけり藤原惟方ハ長門に経宗ハ阿波に流れしに経宗

ハ赦されて還る惟方ハさもあらりれいとある

世世にも泥むときけハ涙川流るとよもめく袖の邪

とて又召還されぬ又伊勢一志郡にあり後撰集に男のいせまうけ

る

君ゝ行方よあらてふ涙川　先い袖まて流るてゝゝ

名所拾遺ゝ

ゝゝゝ

ゐん　ゐん反ぬ也いゐんい往ぬ也きゐんい来ぬるて同意より活るい和語の数
ゐうされと往ぬ来ぬる現在の辞いゐんきゐんい将来の辞将往将来の意
也神代紀より将隠去とかくをゐんとゐるゐくゐ心得て〜かくをゐ〜んも
ぬら反ゐくをゐくぬ〜んい隠去ごくあ〜んの意也又ゐるもの下より又えくり古
今集序より人麻呂ゐんくさくの歌とゐん時よあつるとゐんとゐゆ○元やゐる
ん雪や消ゐんのゐい体の辞とかんゐえんの系也文ゐく欲咳歇消とゐゆ〜まとかけて
ゐゐ辞ゐゐ〜よて凡てゐんゐんゐんの三い過去現在未来の差別也ゐい過去と疑ふ
の辞ゐんい現在と疑ふの辞ゐんい未来とかけくゐゐ詞也ゐもいつり○新台今集より
やかにゐもゐまいゐえゐん春日野をゐ〜去れ見ゐまかせたゐゐゐん
上のゐんいゐるであゐん也下のたゐゐんいまかせくあれよゐゐ詞てあ反た也
よて寿ゐ詞ゐも下知ゐる辞ゐもえゆゐれんあり反又えねまく埋ゐるんゐ
ゐゐ心つけゐんの数是也又
ゐゐゐいての河ゐいあせゐゐんゐゐゐゐもぬくたゐゐ〜ゐん
是も上句下句ゐりにゐんゐゐゐひて願ふ意のゐん也たゐんゐゐふ辞挙も平

より成ゐんもゐくゐれのまがれいゐゐゐゐゐんも同〜あせねえゐ孫ゐくゐ
ふ意同音ゐれいゐゐゐひゐゐんと重孫ゐゐゐゐ〜菅家萬葉より年
の内皆春ゐゐ〜ゐゐゐんゐ六帖よりもゐを草種のかゐゐゐいゐゐんゐもえ
えゐゐゐ又
ゐを椿ゐれもゐゐんゐさゐりあゐゐゐいゐゐゐえゐゐん
是も上下ともより結句よりゐんゐ置てまとかけゐゐゐるものゐゐ
ゐんぢ　汝乃而爾若戎をよめゐゐ名持の義ゐゐ〜〜大汝ゐも大名持と
も書ゐるよて知て〜汝通〜てゐ女より作る左傳より爾有乱心充厭國不汝堪専
伐伯有而罪一也〜〜ゆ三字の詰意考へ知一〜若い史記より見えん或い詩経
より多〜
ゐんぢ　那何曷渠胡遐盍安寧詎烏奚庸ゐゐとゐゐゐゐ日本紀より誰字も
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐの義也寧も胡也と注せゐ詎も渠と同〜〜ゐ知の詞也〜
注を盍い何不の合音ゐゐてゐゐんぢ〜ゐゐ〜〜ゐ再讀ゐゐ俗語い皆那字と用ゐ
ゐゐゐ庸詎寧渠何渠ゐゐと二字〜〜ゐゐて用ゐゐゐもゐんぢゐゐゐゐ〜〜

曷通して過より作る闥も曷より同じ莊子より闥を盍より通ず孟子九害
喪も曷の音よりあり

なんど　納戸とも収納の所をいう平治物語に納殿とあり或一本納戸
より作る今俗なんどと呼ハもと納殿の音轉ずるなり即ち殿の也或ハ所
府也という○田舍にいふ所を家内に納戸あるなり○西土に納戸と
いハ年貢を倉場まで納めより行者ないう明律に令納戸親自行槩とあ
り

なんぎう　藤氏の学校勸学院ないふ南曹ともいう大学寮より東西の曹司あり
菅江の二家是を主り人を教る処也彼大学の南に此院ありしなり
南曹ともいう紀氏の長者なる人此院を管領す贈太政大臣冬嗣公の草
創也○和氣朝臣清麿大学南邊に私宅置私文院と日本後紀にあり

なんとそぐ　何為ないふ日本紀の古点にいふなんすそぐとあるなり
てにをハの如しまた四昏翼注に作何故音という胡為乎ともに同じ

なんぐ　亟字向字なんぐなるべし亟字也あるかるを亟死
なんぐるを向暮ともいふの類なるべし推して二字ともたぐすとのごとを
ふ

〈ふめ　助語にいふ古今集に春ごとに花のさかりに有あるべしとあり○滑
とあり浪と通ずるなり○倭名抄鞍馬具に鞍脊
をあり滑の字也とあり長秋記に豹那女とあり今雷著とあり是也○同書
に白痴と訓とあり滑の字也○軽字とあり日本紀にあるづるとあり也
並の字あるなり○行とあるい陸奥の郡に行方あり當時の姓に行田あり列の
字あるなり並倉をふめくらとあるなり内宮年中行事に又少○建武年中行
事に両宮のふめくらいふ延喜式に侍医先学とある是なり

ふめげ　物語にいふ續日本紀に無礼とあり埃襃拙に平とあり軽氣の字也
平ハ平等平懐の字なるべし枕草紙に文こまやかのるあきしいふも同じ俗に
ふめときるなどいふめりふめんだいふるべしいふるる也

たぶ　軽氣なるべし可畏といふる也古歌に

いりこいふあしかこそとうんかけまくかしこきまもさて

△ふも　續日本紀ふしの宣命に詞に多し後に見ふんかくふんとうの教のふんに同し台家に例時儀法に至心を志いもとうみ和南とくうふもとよむ又神代紀のふんとうつると皆ふとしとうとうとう南無をふもとうふう如しとうつう古今集の序ふ赤人の人丸に下にたんとかくふんあうくる詞書にもかくさぐうにふんやういあうる又見ふん都鳥とうひくるとの教ふんに教にはうえさると古今物名にうんふんうせいんかとうつる皆同し意也一説にぐとうふいきをゆるやうに延てふんとうふもとうつう○源氏にふも當來千載集にふもあみくに五字ふのみにおとうえさう字彙に胡人拜稱南謨とうひ竹窓二筆に如梵語南無此云歸命とうもうひ仁王経疏に梵云曩謨此云帰命亦云頂禮とうゆ今俗梵漢并挙てふむをめうとうらいと唱つう般若理趣分の呪に納慕とうふも同し

△ふや　魚肆とうふ魚屋のふや也尾州にていい材木かしをと称せう神宮に八物おとう伝称を納屋とうう

ふやむ　日本紀に懊悩又痛又難又擧力を訓せう萎病の字ふるし新撰字鏡に謬もよめうなやまうもうふもまを友むも神代紀に逼悩又危困とよめう○屯迍に同しふやむも

ふやらふ　源氏にみゆ難のやうにひも又ふやうんもけうかしていう神代紀に逐をやらふとうめう今鬼やらひとうう

△ふゆ　萎字をよめうしをるふゆに同し

ふゆみ　倭名抄に梱をよめう射鼠弓也と注せう縄弓に系るし

△ふよ　今こる辞ふう清女納言集に

ふるふよなよなよしうひしに呉竹のふしをふくつる枝ふをもける

荘子に因是已已而不知其然謂之道の字法に似せう林注に以下句已字粘上句已字些是筆端遊戯作之處しゆ○大和に語未にいう

ふるせ　名寄に志ふる所のうせあるとうふも親房卿の説に哥枕に陸奥に限うくく多くく名寄に太宰府に数あうくくけに鎮宇府都督府に国家に領袖ふれうるし

なよびやう　娜娜の意也るゝあかしも同しゝみのゝなよゝゝゝも又えゝう

〈るゝう　奈良と日本紀ゝ平ゝゝゝえゝうゝて平城ゝもいつる也みゝけ家乃名ゝ

おゝゝゝ

琴の扇をみるに琴をの額也○立るに待るをかるすたる
に馴る家也日本紀に鷹の毒に得馴をたるるえてとりあり後拾遺集に
とやかつ我をたるるしてたるるをもるるるるる移也
たるるる　らく反る也きるるるる
ゆるふ也みるるるるるるるるるるる見説をるるるるるるるるるる言るる也言説とよ
めるる○柰落は地獄の梵語也具に柰落伽（ナラキヤ）るるる也慈覚大師のるる
るるるるるるるるる底に入めるるるるるるるるるる

ゐなくよ　物なくなくまい物よりぬるしらふ意也ふあ反ゐ也ゐく反ぬ也

万葉集よかうやうのゐくとらふまい不字を用ひるを君不(ナラ)有国(クニ)〜を君不(ナラ)有

名国〜を尺古今集の紅葉河なくあを六帖よハ紅葉あへぬるとえろ是也

ゐのこやこ　いま一の形代都の八重櫻〜〜ハ詞花集よ一條院の御

時奈良の八重櫻洲人のをりる其をる御前よ侍りる是ハ其花に題よ

て秋よあ〜仰てをりれハいまも〜〜いま一〜らふて今日〜〜らけ時をかめ

ゐる心なく自〜〜ゐる也〜らを河ぬ米ゐは心詞よく〜〜のひりる武

拾遺集よ

折てゐるかひををゐる樣なりふ九重よ白ひまをうて

後拾遺集よ

ゐ河まゐ紀八重咲き九の九重ゐ〜ゐ少ハ露のかけをゐりる

ゐ二首ハ詞ゐ〜ゐやおりゐ〜ゐきんをれ〜今ハ殊の外ゐゐ〜ゐて侍

ゐまゐハ映字の意也色ゐを香ゐを声ゐを〜ふ詞ゐる中ゐを萬葉

集よ朝日ゐけゐ是ハ山〜らふ如く古人ハ色の方よ多〜ゐり○祖父ハ祭主大

中臣能宣朝臣父ハ祭主輔親朝臣あれハ伊勢大輔〜らふゐる〜〜大輔ハ名ゐり

よ〜名を重ねらふハ大輔の名ゐらふ故ゐる〜〜〜らゐり

結詞よらるハ何〜くよあり〜〜らふと約めゐる辞也万葉集よ有の字をよ

みゐりりよ有来と填字よふあ反ゐ也在も同〜〜ゐりハ易らかをゐ〜〜ゐる辞

ゐりハ〜〜つめて優ゐ〜〜ゐるりりハ事を〜〜ひつめく強ゐ辞也う〜〜ふ

も爰ふも人よあくねゐりりの類よて知〜〜ゐりけゐれのゐちハ一首のよみ

ゐよ据〜〜○古事記よ位をゐくゐり喫をくふゐゐとゐゐの義ハ見聞物の上を

他ゐり言時よ添る辞ゐり〜らゐ〜○也字をゐゐハ語の已辞(ヲハル)又語之辞〜〜といゐる

よ似〜ゐり語ハよおけゐ決詞の字ゐりをゐ〜〜ゐゐみ事ゐゐり古事記萬葉集ゐ

〜の古書よゐり〜〜ゐゐの例ゐ〜〜尚書よ安の字ゐ〜〜ともいひ詩経の況也永

嘆荘子乃且也の如きハ徐鍇ゐ語之餘也と注ゐる是也○休貞をゐり〜らふ

ハ成の義ゐ〜〜日本紀よ體勢をゐりゐゐふりゐりかゐちれ数是也○萬

葉集よ産業をゐりとゐゐり生出る義ゐ〜〜○名よ業をゐりとゐゐハ産業の

意也登をゐゐも日本紀よ登稔をゐりをひゐりとゐる意也勢をゐゐハ形勢

の意橋逸勢あり○癩病を俗よみてらつて病の髒をらふ也
あらりり　凡てあらりりとらふ詞ハ欲するを文ることを上よりのちくわるこ公挙て
そをもう此義まく有りりまう解せる所よりふ也
なりまく　万葉集源氏よりゆ日本紀ハ生業又農をよみて遊仙窟ハ家業とよ
み霊異記ハ産業とよみてまくハ助の辞福まくひの如く
おりどころ　日本紀ハ別業田宅等をよみて産業の豪也田家とも訓まう
ゐらづる　日本紀ハ生又化生をよみて生出まくもよゆ今も東人ハ草木の生るを
ゐるまらつて伊勢物語よりゐんさぐりんとつる是ゐりくして真名本ハ将生く
埴ゐりく○登祚をよみて成出の義今ゐりあがるまらふ如く大和物語ハ我
身れえゐり出ぬまとおりひたまひとよまえまう俊成々
四方の海をゐりめけくして波をまん付まや我ゐりも出つま
日本紀意宴の和歌ハ
狼を投けく後ゆ大津父ハ浜草よりゐりゐ出まうりゐる
ゐりさがれ　成出ハ対ゐまう言ハ也砂石集ハ伊勢国の夫ハまくまくとまの面白鳥

上よりゐりひりれハ
花ゐりハ折まを人の向ゐまをなりまうゐりまを折をつまけを
ゐりまん　伊勢物語の歌ハよりゐりまゐ反らゐれいまうゐりまんを延まる語也此
れハ後撰集ハ上毛野峯雄ハ歌ハまく終の句月を限をまくまを六帖ハ
大ままハ峯を平らハ成ゐりん山のあをいを月をかくゐる
ゐりまう　古今集序ハ天地ゐりいうまくまを也
△なる　詞ハらふハふあ反なの義也よりて万葉集ハ天ゐるやを天有まも天ハ
有哉まも也せう詳略の異也又古今集ハ安ゆゐるらふゐる序を俗ゐりたまハ
句調の助辞也まらう○神代紀ハ具又生成をよみて菰菓ゐまらふも是也○
鳴をまゐるハ音声れ物ハらふ是也全漸兵制ハ响を譯まう○万葉集ハ織を
よゐるハゐれ垢づまたる意ゐる一一○皮つまれ棒の如き材を俗ハゐるまらふ
成乃義まや
ゐりまく　馴をまゐり習の義まらふ反義也○習りんまう馴ハまらふ諺ハ習慣
如自然まらハ一義ハ落る也

なるかみ　鳴神也雷は邑を称する也万葉集に動神とも書り河圖帝通記に雷天地之鼓也とゑえり式に主水司神座鳴雷神社○鳴と鎮もるやつ〜ゐひに東原〜〜俗に云ふい堂上の東原家は菅神の後裔なりて也とかつて三才圖會に見雷聞響冒悪氣者多逢難故被袍塞耳目以為上策とゑゆ○村上天皇の御宇滝口の下部雷に逢て半死半生なり〜を医師忠明灰を多く集め埋〜置とる事今昔物語にゑゆ

なるまくら　神代紀に比及とまり常に和よりころ〜ろ〜ゐとも口語に譯とは是也

なるかづら　日本紀に鳴鏑とゑめり鳴矢ともいつ万葉集に響矢とゑゆ荘子の注に響箭とあり古哥に

水の面にむら〜弓男にゐる矢うく鹿こゑるひく坂の上にそある

舊事紀に大山咋神者鳴鏑神也とゑえり

△ふれ　物に泛く指てらふの辞也汝とらふ如〜名有の家ゐる〜とをられれ

をれのれとらふに同〜俚言にそちらとらふ如〜○助語にふいめりの家也か

まやとらふもあるやと同〜但〜ゐい急也ゐれい緩也けるけるの例也○春ゐ

れい秋ゐまいふあ友ゐれと春されいなれ同語の轉せ〜ゐや○川とゐ

ゐとらふも古の韓語也今朝鮮人かいとらふ〜〜○馴るをゐるるもらゐる

ゐるも押も同〜玩熟也と注す

△ふろ

△なゐと　名和とあり太平記にゑゆ〜出雲の地名也上野の那和も盛衰

記にゑゆ

△ふゐぬ　日本紀に地震地動とゑめり鳴居の家ゐやゐふゐるもよみ

武烈紀の歌にたゐねがゆゑこがくもゐえゑり俗にゐゐとよみ笑末の冬関

東大地震に通茂卿

神つ國ゐ代のいとやもゆりまゐて知ぬ代のあや〜をそひく

○西國及中國に〜皆ふゐぬ〜らふ○地震祭は陰陽家に祭也○占地震哥

四ツひて〜り五七の函に九を病六つと八ツはいりもこをゐり

△ふゐ〜ゐ　海國に〜く地震〜て潮の高〜ばいりつゐ〜に女さゐる也

△おにび　儺追の祭也尾張國國府の社おにびらつり遠江國淡路國玉神社おにび吉あり〜年ゝくるれば祭とらひ〜ゝそるやらふと云通〜

又正月十三日の夜旅人を捉(土餅を負せく逐ふ也茅をて小人形仮作りて儺(ぬ)撃つ此(ぬ)小形と称も別る大形ありて儺を負ふ也元亨釈書に筑紫観音寺に正月上旬行人を捉く駈儺を約ふ〜ゝ〜ゝ浮屠修正(ニヤウ)の法ゝて神事と心得るハ非也鬼走の條考(首)〜

倭訓栞前編十九終